

# 聖杯探求と倫理的自己形成

—— 『パルツィファル』 への覚え書き ——

吉 田 量 彦

はじめに

西欧中世の騎士物語にアーサー王伝説が絡み、これにさらにキリスト教起源のモチーフが取り込まれる形で形成された聖杯探求の物語は、今日では洋の東西を問わず広く知られている。「聖杯」がどういうものか具体的にイメージできなくても、また聖杯を探し求めて遍歴を繰り返す騎士たちの物語の具体的な筋書きまでは知らなくても、「アーサー王と円卓の騎士」を巡るさまざまな物語が存在すること自体を知らない者はいないのである。岩から剣を引き抜いて即位したとか、妖精から魔法の剣を借り受けたとか、アーサー王説話の中でもとりわけ有名なエピソードは説話集や映画を通じて多くの人々に知られているだろうし、またランスロット、ガウェイン、トリスタンなど、いわゆる「円卓の騎士」の中でも独立のエピソードを与えられた人物なら、その知名度は決して低くはないだろう<sup>(1)</sup>。リヒャルト・ヴァーグナーが自作の中でしばしば取り上げたこともあって、クラシック音楽の愛好家たちの間でも「聖杯」を探し求める「円卓の騎士」というモチーフはよく知られている。最近ではコンピューターゲームの分野でも、アーサー王伝説と聖杯探求にモチーフを借りた伝奇作品が登場して支持を集めている<sup>(2)</sup>。

(1) 繰り返し邦訳され、世代を越えて普及した代表的な説話集として、ここでは [Bulfinch: 1858] を挙げておく。

今日の聖杯説話の大元になったのは、12世紀から13世紀にかけて書かれたいくつかの散文の物語と叙事詩だが、聖杯なるものの位置づけは作品ごとに異なっていた。比較的古いとされる作品では「生首をのせた皿」(マビノギオン)や「宝石が散りばめられた金の皿」(クレティアン・ド=トロワ『ペルスヴァル』)といったモチーフが、「血の滴る謎の槍」というもう一つのモチーフと対になる形で登場するものの、大きさや形がはっきり描写されていない上、ただの食器なのか祭具なのか、それとも何か魔術的・宗教的起源をもつ特殊なアイテムなのか、そういったことも全く語られない。登場する場面はこうである。何らかの理由で遍歴中の主人公が、とある城に辿り着く。城の広間で供応を受けるうちに、件の怪しげな物品を手にした人々が主人公の傍らを通り過ぎるが、以前に別の人物から「異様な出来事を目にしても来歴を問うたりするな」と言われていた主人公は忠告を愚直に守り、あえてこれを無視する。ここでは「槍」や「皿」そのもののよりも、それらを目にした主人公の取る態度こそが、物語の進む上で大きな役割を果たすことになる。槍も皿も結局の所物語の表舞台を飾る小道具であり、その来歴が詳細に追求されることはない。

これに対し、ほんの少し時代が下ると<sup>(3)</sup>、槍も杯も単なる小道具ではなく、その特異な来歴が既に大きく膨らまされている(ロベール・ド=ボロン『聖杯物語』)。槍は十字架上のイエスの脇腹を突いたとされる「ロンギヌスの槍」であり、杯の方はイエスが使徒たちとの最後の晩餐で用い、突かれた脇腹から溢れたその血を使徒の一人がこれで受けたという「聖杯」であるとされる。それまで謎の固有名詞だった「グラール(独 [Heiliger])

(2) 『Fate/stay night』(©Typemoon, 2004)。アーサー王をインターネットスラックで言う「萌えキャラ」に仕立ててしまう大胆さは、オタク王国日本の面目躍如と讃えるべきだろうか。

(3) クレティアンとロベールの作品については、後者の成立が前者より遡ることはないという点では研究者間におおよそその一致が見られるものの、前者をより古いと見るか両者ほぼ同時期の成立と見るかをめぐって諸説あり、判然としない。

Gral／英 [the Holy] Grail)に「皆を満足 agreeer させるもの」という怪しげな、しかし一応もってもらしい語源説明が当てられ、にわかには神秘的かつ魔術的な性格を帯びるようになったのはこれ以後のことである<sup>(4)</sup>。

ここで取り上げるヴォルフラム・フォン＝エツェンバッハの『パルツィファル Parzival』<sup>(5)</sup>という作品は、ほぼ同じモチーフを扱いながら、上記のいずれとも少しずつ異なる。主人公パルツィファルが遍歴の途上で目撃する「槍」と「聖杯」にはある神秘的な機能が備わっており、とくに「聖杯」についてはそれがキリスト教的な神の奇跡に由来するものであることが示される。このような説明はクレティアンらの先行作品より一歩踏み込んだものである<sup>(6)</sup>。かといってロベールのように、こうした来歴がイエス受難の伝承に直接結びつけられ、その聖遺物的な権威がくどいまでに強調されることはない。槍も杯も物語の特定の時空的文脈を越えて活躍することはなく、既に述べたように、主役はあくまでこれらの小道具に関わる登場人物たちなのである。

この作品がドイツ語圏の文学史上どのように位置づけられ、後世にどのような影響を与えたのか、そういったことについて書くつもりはないし、その能力もない。また、あらすじは以下で簡潔に紹介するが、それは冒頭から結末までをまんべんなく論じるためではなく、むしろいくつかの特定の場面を集中的に考察するための予備知識として、全体の話運びを押さえ

(4) 聖杯物語の初期の形が確立されるまでの大まかな経緯は [Mertens: 2003] Kap. 1-4 (S. 9-103) によって概観することができる。

(5) 中高ドイツ語の母音間の *v* は有声音か無声音が微妙な音で、地域や時代によっても発音にばらつきがあったようだが、ここでは慣例にしたがって「パルツィファル」としておく。現代の標準ドイツ語では「パーツィヴァル」もしくは「パルツィヴァル」に近く発音される。

(6) 『パルツィファル』随所に散らばった「聖杯」の形態描写および機能についての言及は、[Bumke: 1976] が18の項目に分けて要領よくまとめている (S. 72-73)。これによると、この作品の「聖杯」は外見的には不定形の石(宝玉)でしかなく、「杯」と呼ぶのはきわめて不適切なのだが、Gral という言葉が一樣に「聖杯」と邦訳されている現状を考慮してあえて直さなかった。

ておくためである。私見では、上で言及した場面での主人公パルツィファルの態度、そしてその態度が元となって彼が物語の中で辿る人生には、人格形成の途上で誰もが直面するはずの、きわめて普遍性の高い問題が浮き彫りにされている。このような主題は作者ヴォルフラムが初めて取り上げたわけではなく、一定の思想史的伝統をふまえたものである可能性が高いが<sup>(7)</sup>、『パルツィファル』の作者はその堅牢な構成力を駆使し、この主題を他に類例を見つけにくいほど生き生きとした形で描き出すことに成功している。

筆者はとくにドイツ文学を専攻したわけでもなく、中高ドイツ語の読解も覚束ない。そのような素人が、中世ドイツ文学史上一二を争う重要な作品についてこのような文章を書いてしまったことについては、主題の持つ普遍性という点からある程度の理解が得られるのではないかと思われる。

## 1. 前半のあらすじ

本題に入る前に、前半のあらすじを簡単に記しておく。『パルツィファル』は19世紀前半以来の伝統として、今日の版でも16巻に区分されているが、内容的に最初の6巻を前半部、残りの10巻を後半部とするのが適切であるように思われる。なお、日本ではアーサー王説話の登場人物はほとんど英語読みで記憶されているので、英語名のある者はカッコ内に併記しておくことにする。

主人公パルツィファル（パーシヴァル）は、ヴァリス（ウェールズ？）地方の女領主と、遍歴の果てにこの地に流れてきた屈強な騎士の間に生まれる。父はパルツィファルが生まれる前に戦闘で命を落とし、母は夫の死に打ちひしがれるあまり、生まれたばかりの息子を連れて人里離れた森の中に引きこもる（1-2巻）。自らの素性について何も知らされずに育った

---

(7) この点における『パルツィファル』と先行作品（とくにクレティアン）、さらに13世紀初頭の歴史的・思想的背景（とくに十字軍問題とキリスト教神秘思想）との関連については、[Mertens: 2003] S. 44-50を参照。

少年は、偶然アルトゥス（アーサー）王配下の騎士に出会ったことで外の世界に興味を持ち始め、騎士になるべく故郷の森を離れる。母親は心労のあまり息子を見送った直後に倒れて死んでしまうが、パルツィファルは気付かない（3巻）。世間知らずのため行く先々で問題を起こすものの、天賦の膂力を武器に切り抜けたパルツィファルは、やがて美しい女領主の愛を得て結婚するが、望郷の念に駆られて再び旅に出る（4巻）。旅の途中でとある城に一夜の宿を借りたパルツィファルは、冒頭に紹介した「血の滴る槍」と、飲食物を無限に現出させる「聖杯」の奇跡を目の当たりにするが、それについて質問する機会を逸してしまう（5巻）。ついにアーサー王の宮廷に招かれ、正式に円卓の騎士の一員に任じられたのも束の間、突如現れた異形の女性に「聖杯の城」での対応も含めた遍歴中の愚行蛮行を暴露され、パルツィファルはそれまでの自分の生き方に重大な欠陥があったことを思い知らされる（6巻）。

前半部のパルツィファルは、既に騎士としての天性の戦闘能力を存分に発揮しながら、その早熟な肉体とはあまりにも不釣り合いな、未熟な精神の持ち主として描かれる。一言で言うと、場の空気が読めないのである。その行動の指針となっているのは、別れ際に母親から与えられた細かな忠告であり（3: 127, 13-128, 10）、後に知り合う老人グルネマンツからそれらを補足修正する形で与えられる「騎士としての心構え」であるが（3: 170, 10-173, 6）、パルツィファルはこれらの忠告や心構えを個々の状況にかかわらず、常に言葉通りに実行しようとする。母親から「暗い（＝底が見えないほど深い）淵を渡ってはいけません」と言われたために、浅瀬に差した木立の影が消えるまで小川のほとりで一晩野宿したり、「高貴な女性が指輪とともに／優しい言葉をくれたなら／どうぞ指輪を受けなさい（……）口づけなどを求めつつ／よく抱きしめてあげなさい（3: 127, 26-30）」という忠告を、通りがかりの人妻にそのまま実行して夫婦それぞれから恨みを買ったり、狙ってやっているのではないかと思わせるほど始末が悪い。そもそもグルネマンツに助言を乞おうとしたのも、老人の白髪

を見て「白髪の賢者に礼儀のことで／お教えいただくことなどあれば／よく言うことを聞くのです／逆らうことはなりません (3: 127, 21-24)」という母の言葉を思い出したからに過ぎない。

助言というものは具体的なものであればあるだけ、特定の条件を満たした特定の場面でしか通用しないマニュアルのような性格を帯びやすくなるが、実はそうしたマニュアルを本当にうまく使いこなすには、その妥当性を一段高い視点から俯瞰するようなより普遍的な原則との対応関係をわきまえておくことが不可欠である。多少なりとも普遍性の高い上位の原則によって意味と有効範囲を限定されて初めて、具体性の高い助言は行為基準としての強みを発揮することができる。暗い淵を渡るべきでないとは、深い川を不用意に渡ることが生命の危機につながるという危機回避の原則と、水深が水面に差す光の反射量で大体目測できる（暗い＝深い）という経験則を下敷きにした忠告であり、たまたま日陰になっているだけの明らかな浅瀬を念頭に置いたものではない。また白髪の人の言葉を尊重せよというのも、年長者を尊重するという通俗的な倫理原則と、老人の助言がしばしば長い人生経験に裏付けられた信頼のおけるものであるという経験則、更には老人は禿頭でなければ大抵白髪であるという経験則等がないまぜになって発せられた忠告であり、白髪の人の言動を鵜呑みにせよという意味ではない。

もし与えられた助言を、上で見たようなより一般的な観点から俯瞰できないなら、助言はきわめて機械的に適用されることになる。「影」に反応して自動的に渡河を思いとどまり、「若い女性」に反応して自動的にこれを抱きしめ、女性の「指輪」に反応して自動的にこれを奪い取り、老人の「白髪」に反応して自動的に助言を求めるパルツィファルの行動は、まさしくこのようなものであった。それはたとえば、空腹時のライオンがシマウマの縞模様反応して本能的に襲いかかるような行動と大差なく、本人の主体的裁量がほとんど介在していない。逆に言えば、そうしたあからさまな行為の発現刺激が与えられない限り、彼は外界に対してまともな反応

を返せないことになる。実際、もしグルネマンツがつるっばげの老人だったら、パルツィファルは何のためらいもなく無視して通り過ぎたに違いない。

## 2. 聖杯の城で

幼い子供が両親の言いつけを文脈に関わりなく実行しようとしたり、あるいは反対に、言いつけの枠内に当てはめにくい状況で茫然自失に陥ったりすることはよくあるが、パルツィファルの行動はまさしく大きな子供のそれとして描かれている<sup>(8)</sup>。助言の中の個々の要素に対して機械的に反応することしかできない彼は、自らの行いに対して個人としての責任を問われうるような、十全な意味での行為主体＝倫理的主体とは見なされないのである<sup>(9)</sup>。

母親とグルネマンツから授かった行為規則を半自動的・機械的に現実に適用していた、いわばマニュアル人間のパルツィファルは、やがてもう一つの問題に直面する。目の前の出来事の中に、自動的な反応をうながす「何か」が見つかるうちはまだいい。では目の前でマニュアルにはっきり書かれていないことが起きた場合、どう対応すればよいのだろうか。この問題を浮き彫りにするのが、冒頭で紹介した「聖杯の城」での一連の場面である。

大広間に通されたパルツィファルは、城までの道順を教わった老人＝城主と再会し、城主の隣に座る。広間には既に大勢の人が集まっているが、

(8) 事実、前半部では主人公の代名詞として、男の子／小姓を意味する knabe/knappe という言葉が頻繁に使われる。

(9) 個としての最低限の自己同一性を象徴するのは固有名だが、遍歴の当初、名を問われたパルツィファルは「坊や、坊ちゃん、かわいい坊や／そんな具合に呼ばれてた／うちにいる人みんなには (3: 140, 6-8)」と答えているので、自分の名前すらどうやら知らなかったらしい。彼の素性に気付いた従姉に「そうよ、あなたは「パルツィファル」／「貫き通す」という意味よ」という形で初めて教えてもらうのである (3: 140, 16-17)。

やがて血の滴る槍を下げた男が現れたのをきっかけに「泣く者あれば叫ぶ者あり／広間こぞって大混乱／ひとが百人いようと／無視すべくもなき大騒ぎ」(5: 231, 23-26) が起きる。男が出て行き、ようやく騒ぎが治まった所で酒宴が始まる。豪華絢爛な衣装に身を包んだ淑女たちが次から次へと登場する中、やがて城主の（したがってその隣にいるパルツィファルの）目の前に「聖杯」がもたらされる。「手で指し示せば意のままに／たちまち現る料理の数々／温かいもの冷たいもの／手を加えたもの生のもの／獣の肉も家畜の肉も」(5: 238, 13-17), さらににはありとあらゆる飲み物までも生じさせる「聖杯」の靈験を、パルツィファルは間近で目にするようになる。

これらの怪異に対するパルツィファルの反応は「何も聞かずに遠慮して／思うはグルネマンツのこと／『別れる時におっしゃった／「くどくど質問すべからず」／このお城でももしかして／あそこと同じになるかもね／それなら何も聞かずとも／誰かが教えてくれるはず』」(5: 239, 10-17) という段に集約されている。要するに何もせず、何も言わないことを選ぶのである。

パルツィファルが何も感じず、何も考えていなかったはずはない。聖杯を運んで来た婦人を見て、入城の際世話をしてくれた婦人と同一人物だと気付いているし(5: 236, 10-11), 何よりも上に引用した箇所直前ではっきりと「パルツィファルはこの不可思議に／よく気がついていただけ」(5: 239, 8-9) と前置きされている。しかし彼にそれまでに授けられたマニュアルには、このような「不可思議」に直面した時の直接の対応策は載っていないのである。頭の中のマニュアルを懸命に検索した彼は、やがて使えなくもなさそうな一つの条文に突き当たる。それが「あまりくどくど質問するな」というグルネマンツの助言である(3: 171, 17ff.)。前後の文脈から分かるように、老人は質問そのものを禁じたわけではなく、子供が往々にして行いがちな無意味な質問の積み重ねをいませただけなのだ。が、パルツィファルはこの助言を、不可思議に対応しないこと、つまり明

らかに問題のある状況を放置することの言い訳に流用する。

それまで助言＝マニュアルの文言を考えなしに適用していたのと比べて、マニュアルの中から使えそうな条文を検索するという手間が加わっているので、バルツィファルの行動には若干の進歩が見られる。しかしこうした彼の行動は、周囲の状況に主体的に働きかけようとする態度にはつながらない。そこから帰結するのは反対に、マニュアルに明記されていない状況にはとことん関わりを持つまいとする消極的な態度である。それどころか、マニュアルの中にそれを一見正当化できそうな条文をなまじ見つけてしまったが故に、このような態度は今やバルツィファルの内面において恒常化しつつある。それまでの無知＝経験不足に由来する消極性、つまり周囲の状況に対する不自由で限定された関係が、「助言」への遡及を通じて解消されるどころか、逆に積極的なお墨付きを得るに至っているのである。

### 3. 「罪人」となる資格——主体性の芽生え

バルツィファルが「聖杯の城」で示した態度は、その後複数の登場人物から「罪 sünde」という言葉で糾弾されることになる。ここから、彼の行動に見られた進歩は、必ずしも手放して歓迎されるものではなかったことが分かる。それまでの物語の中では、彼はたびたび「愚か者」呼ばわりされることはあっても<sup>(10)</sup>、罪人扱いされることはなかった。他の騎士を殺して装備一式を奪うといった、多分に血なまぐさい行為に既に手を染めていたにもかかわらず (3: 153, 21-159, 28)、彼の行為は「罪」とは呼ばれなかった<sup>(11)</sup>。罪を問うということは責任を問うことだが、それにはまず、責任を問われる当人が帰責可能な倫理的主体として確立されていることが大前提となる。「聖杯の城」までのバルツィファルは明らかにそのような主

(10) 註(8)に挙げた代名詞の変形として「愚かな／経験のない」といった形容詞を付けた形 (cf. „der knappe *tump* (3: 126, 19)“, „unser *toerscher* knabe (3: 138, 9)“ etc.) がしばしば用いられている。

(11) 後に見るように、この行為が改めて「罪」として問われるのは、物語がかなり進行して、バルツィファルが人格的成長を重ねてからのことである。

体ではなかった。上に見たように、一旦「忠告」や「助言」に登場するのと同じ要素を現実の中に認めるや否や、そこからの彼の行動は自動的に決まってしまうていたからである。

しかし「聖杯の城」でのパルツィファルの行動は、もはやそこまで半自動的・半機械的なものではなくなっている。確かに彼は、怪異を目の当たりにして何の行動もとれていない。具体的には、自分たちが置かれている状況について周囲の人物に問いかけ、説明を求めることができない。しかしこれは、質問したり説明を求めたりする能力が欠けていたからではない。そもそも「あまりくどくど質問するな」という助言自体、相手に多少なりとも質問の能力があることを前提にしていないと意味がない。ということは、少なくともこの助言を受けた段階でのパルツィファルは、依然として「愚か者」ではあるかもしれないが、愚かなりに自分の周囲の出来事について疑問を持ち、この疑問を他人への質問という形で解消するという能力が芽生えていたはずである。とすると「聖杯の城」での一連の出来事は、物語の中で最初に生じた、この能力を行使する格好の機会であったと考えられる。

しかし結果としてパルツィファルは質問しない。ここにはたとえ萌芽的なものとはいえ、頭に浮かんだ質問を放棄するという、既に一種の自覚的な決断が関わっている。助言が彼の口を自動的に閉ざしたのではなく、助言に納得した彼自身が質問を止めることを「選んだ」のである。この時「助言」は、もし誰かにその（質問を止めたという）選択の是非を問われたならば、それを正当化する「根拠」として引き出されることになる。

それまでの彼なら、例えば「なぜ川を渡らないのか」と問われても「ママが『暗い淵を渡るな』と言ったから」と答えて何の痛痒も感じなかっただろうし、さらにその「根拠」を求められても質問の意味が分からなかっただろう。忠告そのものよりもむしろそれを与えてくれた「ママ」の權威が行動の決め手になっている場合、そこに忠告の内容とその説得性を「根拠」という形で問い直す余地は生まれず、自分で問い直しの効かない

そうした行動に対して、動作主体の責任を問うことはできない。「聖杯の城」で、きわめて不完全で萌芽的な形ながら助言をその内容面から捉え始めたからこそ、つまり助言そのものを自らの行為を正当化する根拠として利用し始めたからこそ、パルツィファルは倫理的に無垢な存在である「愚か者」としての地位を失い、「罪人」となる資格を得たのである。

#### 4. 何が「罪」だったのか

それにしても、もし怪異を前にして口を閉ざしたというだけのことなら、それを「罪」と呼ぶのは飛躍しているのではないか。異常現象の解明は、それ自体としてみればあくまで認知的な課題であり、失敗したからといって直ちに道義的責任を負わされるようなものではないからである<sup>12)</sup>。

『パルツィファル』前半部を注意深く読むなら、この疑問はある程度解消されるだろう。はっきり明かされるのはかなり後になってからだが、「聖杯の城」での出来事は、実は二重の意味を帯びていた。それはまず第一に、パルツィファル本人にとっては、次代の「聖杯の守護者」となるための資格試験の性格を備えていた。彼はこの試験に気付かないまま応募し、結果として見事に落第する。そしてこの第一の意味においては、パルツィファルは試験に落第した後も決して「罪」を問われてはいないのである。質問を断念した直後の場面で、彼は「この場にそぐわぬ筋運びの／代わりとなればよいのだが」(5: 239, 28-29)との言葉付きで城主の愛剣を贈られる。試験の場で期待された通りの行動ができなかった代償として、剣を携えた遍歴の旅がこの先まだ続くことが暗示されているが、城主の言葉に道義的な非難を読み取ることはできない。それは落第した「愚か者」への同情をいくらか含んだねぎらいの言葉であり、決して「罪人」の罪を暴こう

12) 「どんなに厳格な原罪説でも、期待された問いを立てなかったというだけのことを、それだけで罪に問うことはありえない」という倫理神学上の大前提、およびそれによって初期の聖杯探求物語の作者たちが直面したと思われる創作上の困難については、[Bumke: 1976] S. 66ffを参照。

とするものではない。

しかし第二に、パルツィファルの失敗は「聖杯の城」で彼を取り巻いていた人々にとって、とりわけ城主その人にとって全く別の意味を持つ。当代の「聖杯の守護者」である城主は、回復不能の傷から来る苦痛にいつもその身を蝕まれているが、後継者が決まるまでこの苦痛から解放されないことになっているのである<sup>13</sup>。この意味では、パルツィファルの失敗は彼一人の問題に止まらない。彼は間接的にせよ、他人を苦痛から解放するという別の課題を知らずして背負っており、そしてこの課題にも十分に応じられなかったことになる。

この第二の観点からすると、城主から剣を贈られる先ほどの場面は、いわば一種の「追試」であったことが分かる。城主の具合がどこか悪いらしいことは、登場直後から何度かほのめかされていたし（「病める男」(5: 225, 18)「病のために強い火と／暖かい服が必要で」(5: 231, 1-2)「陽気な気分にもなれず」(5: 237, 8)等）、またパルツィファルは城主の隣という、これに気付くのに格好の位置にいるはずである。しかし「槍」や「聖杯」の時と違い、彼が城主の健康状態を気にした形跡は読み取れない。ついに城主自身が、かつての愛剣を手にしながら「儂もかつては戦いに／これを携え出たものの、不思議な神の思し召し／手傷を負うてもうたわい」(5: 239, 25-27)と話しかける。ここまで直接的に言われても、パルツィファルは何も答えない。ここでついに作者ヴォルフラム自身が顔を出し、彼の態度を次のように評する。「ああ、なぜ尋ねなかったのだ！／なんと嘆かわしいことか！／剣をもらい受けたとき／問いを促されていたはずなのに」(5: 240, 3-6)。追試は失敗したのである。

仮にパルツィファルが追試に「合格」していたらどうなっただろうか。

(13) 聖杯には上述の飲食物の奇跡以外にも、それを目にする者を死から遠ざける働きがあるとされている (9: 469, 14ff) つまり職務上聖杯を見ないわけにはいかない聖杯の守護者は、しかるべき後継者にその地位を譲らない限り、死にたくとも死ねないのである。

もし彼が率直に城主に身体の具合を尋ねていたら、話題はごく自然に、これまでの不可思議な現象の数々に移行したと思われる。城主の傷の来歴は「聖杯の守護者」としての役割と深く結びついており、したがって「槍」や「聖杯」への言及なしに説明し切れるようなものではないからである。不可思議を目の前にして問い損ねるといふ、一旦犯された過ちが、そこで比較的「楽に」回復される可能性はまだ十分に残されていた。この最後の、しかもかなり有利な条件に恵まれた機会すら、パルツィファルは逃したことになる。

パルツィファルに対する「罪人」としての非難は、全てこの「追試」に失敗した後から上がり始める。翌朝城を出て行く際の「『日の差さぬ場におるがよい!』／小姓は言った『この役立たず!／御身が口さえ開いておれば／お館さまに尋ねておれば!／御身の誉れ地に墮ちたり!』」(5: 247, 26-30) という小姓の捨て台詞を皮切りに、偶然再会した従姉からも、事情を話した途端に激しい非難を受ける(5: 255, 2ff.)。アーサー王と円卓の騎士たちの前で受けた非難罵倒の中でも(6: 315, 26-316, 29), 先ほどから見て来た場面が「王 [= 城主] が御身に賜いし劍／御身はそれにふさわしからず／あの場で黙りこくったは まさしく一世一代の罪」(6: 316, 21-23) という形でとりわけ問題とされている<sup>(14)</sup>。城主自らあれほどはつきり「手傷」について語ったのに、あえてその話題を聞き流して剣だけ受け取ったことへの非難と取れる。

このように見てくると、パルツィファルの「罪」は怪異への無反応という認知上の怠慢ではなく、むしろ他人の苦痛への無反応という、倫理的な文脈において語られていることが分かる。しかも「聖杯の城」の主は後ほど判明するように、パルツィファルの母方の伯父にあたる人物であった。病人=城主=肉親への「あわれみ」を欠いた接し方(5: 255, 17)こそ、何にもまして追求され、あがなわれなければならない「罪」と捉えられて

(14) 「罪」という言葉が、パルツィファルに向けて初めて用いられるのがこの箇所である。

いるのである。

## 5. 三つの「罪」——隠者との対話

『パルツィファル』を最初から読めば明らかだが、実は騎士に憧れてにわか遍歴の旅に出る前のパルツィファルは、およそ生きとし生けるものに対し「あわれみ」の心をふんだんに備えた少年であった。面白半分に射落とした小鳥がもがくのを、髪を引きちぎらんばかりに嘆き悲しんだという挿話一つとっても（3: 118, 4-10）、彼に生まれつき備わっていた豊かな感受性の一端を見ることができる。それだけに「聖杯の城」であそままで露骨に示された城主の苦痛に対し、なぜ彼が何の反応も示さなかったのか不思議に思えてくる。「あわれみ」はなぜ、よりもよって一番肝心な場面で働かなかったのか。それが失われていたとすれば、具体的に一体いつ、どんなきっかけで失われたのか。

物語の後半になって現れ、この問題の謎解きに深く関わってくる人物が、隠者トレフリツェントである。パルツィファルにとって母の兄、つまり「聖杯の城」の城主と同じ母方の伯父にあたるこの隠者には、パルツィファルを取り巻く人々の血縁関係を熟知した同族の年長者という、物語の舞台背景を隈無く見渡せる唯一の人物としての地位が与えられている<sup>(15)</sup>。

6巻の末尾で再び旅に出たパルツィファルは、過酷な運命を押し付けた神を恨みながら、長い遍歴を重ねる。当てもなくさまよい続けていることを暗示するかのよう、続く巻（7, 8巻）では物語の主軸が副主人公格のガーワン（ガウエイン）に移り<sup>(16)</sup>、パルツィファルはほとんど姿を現さない。彼が再び物語の表舞台に立ち、トレフリツェントに出会う9巻では、

(15) Cf. [Bumke: 1976] S. 67. 読者が『パルツィファル』登場人物間のきわめて複雑に入り組んだ血縁関係を整理するには、定本（凡例参照）に付された系図表が有力な手助けになる（Bd. 2, S. 805-808）。

(16) ここでは紙幅の都合上扱わないが、騎士道精神の完成者としての「迷わない」ガーワンと、騎士道精神をむしろ「迷いながら」克服していくパルツィファルの対照関係については、[Mertens: 2003] S. 75-77を参照。

既に4年半ほどの歳月が流れている(9: 460, 22)。

パルツィファルのいう「苦しみ」が聖杯に関わるものであることを突き止めた隠者は、その問いかけに応じ、聖杯の来歴や機能、城主を中心とする「聖杯の城」の住人たちの名前や素性や役割といった、それまで解明が引き延ばされ続けてきた数々の伏線を大部分解き明かしてくれる(9: 468, 23ff.)。トレフリツェントが示すこの異様なまでの気前の良さは、前節で得られた結論を間接的にではあるが裏書きしてくれる。聖杯をめぐる問いかけの失敗、つまり「聖杯の城」で露見したパルツィファルの認知上の欠陥は、罪ではない。少なくとも「罪」の本質的構成要素と見なされてはいない。たとえ「聖杯の城」とは直接関係のないこのような場面で一挙に解決されてしまっても、物語の展開上差し障りないような、その程度の問題だったのである。

むしろ本当に深刻な問題とされるのは、ここでも倫理的文脈における失策の方である。当人が目の前にいるとまだ知らずに、隠者はある日城に通された「一人の愚かな男 ein tumber man」が犯した「罪」について、しかもほぼ同じ内容を二度繰り返して語る。「重き罪とは何かといえは／城の主人の苦しみを／そやつは見ていて問わなんだ／ひとを難じるつもりはないが／奴こそ罪を償うべきよ／主の具合を問わぬとは(9: 473, 14-19)」<sup>17)</sup>。

それまで「悩み」「苦しみ」「不幸」といった、自分に責任の及ばない言い回しで身の上を語ってきたパルツィファルは、この場面の直後で隠者に素性を明かし、自らの過去の行いを初めて「罪」と呼ぶようになる(9: 475, 8)。しかしそれは意外にも「聖杯の城」の一件ではなく、場面としてそれよりはるかに遡る「騎士殺し」のことである。聖杯の城での「罪」と騎士殺しの「罪」の大まかな類似性を、隠者から指摘を受ける以前に、既にパルツィファル自身が意識し始めていたことが分かる。

(17) 少し後で、同じ内容の非難がさらにもう一度繰り返される(9: 484, 21-30)。

「赤い騎士」を決闘で殺してその装備を奪ったという告白を聞いた隠者は、殺した相手とパルツィファルが遠縁ながら血縁関係で結ばれていたことを教え<sup>18)</sup>、騎士殺しが実は広い意味で肉親殺しでもあったことを明らかにする。さらに隠者は、もう一つの「肉親殺し」も暴露する。母が旅に出た息子を案じるあまり悶死したこと（3: 128, 18-22）を、パルツィファルはここで初めて知らされる。

置き去りにされる母の苦痛に気付かず騎士としての成功を追い求めたことも、他人を殺すことの重みに気付かず武具ほしさに安直な決闘を仕掛けたことも、いずれも「他人の苦痛への無関心」という点では「聖杯の城」での一件と同じ構造に貫かれている。とすると、パルツィファルの「あわれみ」の心は、決して「聖杯の城」で突然失われたわけではない。むしろそれに先行する二つの同形の行いによって、既に多かれ少なかれ機能不全を起こしていたのである。三つの行為それぞれで問題となる「他人」が、ふたを開けてみればいずれも遠近の差こそあれ血縁関係で結ばれた人物であったという符合も、これらの行為の同形性を強調する効果をあげている。

## 6. パルツィファルの成長と大団円——後半のあらすじ

よく「罪を重ねる」というが、このような言い回しには、似たような状況で似たような問題のある行為を繰り返すうちに問題そのものを問題と感じられなくなっていくという、一種の心理的悪循環がうまく表現されている。似たような罪を重ねる中で、ひとは「罪」そのものに対して鈍感になっていくのである。他の生き物の苦痛に対してあれほど敏感だったパルツィファルの心も、こうした悪循環の中で徐々にその働きを鈍らせていったものと思われる。

前節で見た隠者との対話を通じて、パルツィファルはようやくこのような悪循環と決別することになる。それまでの彼は、自らの（主に「聖杯の

(18) 「定本」付録の系図（Bd. 2, S. 807）より、8親等の関係であると分かる。

城」での) 失敗を簡単に運命という言葉で片付け、神を「わが苦しみの後见人 (9: 461, 10)」として呪っていた。運命に操られて行ったことなら、本当の意味で「行った」のは自分ではなく運命だから、そこに生じた不都合も自分の「罪」ではなく、結局は運命の主宰者としての神に責任があることになるだろう。このような考え方を突き詰めていくと、およそ自分が「自分」であるという、誰もがごく当たり前に有している自意識そのものを希薄化させることになる。そもそも、ひとは自身の活動を「自らの」行いとして自分に引きつけて理解することでしか「自分」というものを確認できないからである。運命や神を持ち出して責任／罪の問題に直面するのを避け続けようとするかぎり、ひとは「自己」の不運を嘆きながらまさにその嘆きの源であり主体であるところの「自己」を抹消しようとするという、行為論的にきわめて矛盾した戦略を取らざるをえない。

しかしこのような、責任の問題を神に委ねる形での自己抹消の試みは結局の所成功しない。当てのない遍歴などまさにその典型だが、ひとは極端な絶望に包まれているように見えるときでも、実は必ず何かしら試みている。そして試みるからには、その試みが何らかの形で現状を多少なりとも自身の目的に適った方向に変えうること、つまり「うまくいく」ことを想定しているはずである。とすると、いつも既に何かを行おうとしている存在=人間にとって、神とは本来的に自らの行為を「助ける者」でしかありえない。行為を「うまくいかせる」者としての神への暗黙の「信頼」を前提しない限り、何かを「行う」こと自体が不可能となるからである<sup>19)</sup>。この点「御身の心がまともなら／神を信頼するのです／神は御身を助けるもの 神は助ける者なれば (9: 461, 28-30)」というトレフリツェントの言葉も、キリスト教神学の原罪論や恩寵論を背景に語られているものの、決して特定の教義の押し売りではなく、むしろ誰もが暗黙裡に持ち合わせて

19) 神という概念をこのように、あらゆる行為の背後にいつも既に成立してしまっているはずの「根源的了解」として解釈しようとする試みについては、[Yoshida: 2005] p. 59-68を参照。

いるはずの「まともな感覚 sin」に訴えかけようとしている部分が多い。神はあくまでひとが「自ら」行うことを助ける者でしかなく、ただだからこそ、行いやその責任を肩代わりしてくれる主体とはなりえないのである。

隠者との対話を通じてパルツィファルが強く自覚したのは、まさにこの打ち消そうとしても消しようのない「自ら」の主体性であった。過去の行動を「罪＝あわれみの欠如＝他人の苦痛への無関心」という倫理的文脈から捉え直すことは、それらの行為に対して自らが負っている、他の誰にも肩代わりさせようのない責任を強く自覚することにつながる。そしてこの自覚が彼を、それまで必死に目をそらしてきた事実、つまり自分が既に倫理的主体として成熟しているという事実と向き合わせることになる。

再びガーワンの物語（10-13巻）が挿入されるので分かりにくいですが、パルツィファルがこのような自覚に至った後の展開はきわめて速い。ガーワンと合流し（14巻）、異母兄との意外な対面（15巻）も果たした彼は、最終巻で再び「聖杯の城」へ向かう。この時、行きがかり上ガーワンとも異母兄とも一戦交えることになるが、いずれも決定的な瞬間に相手の正体に気付いて「肉親殺し」の繰り返し<sup>20)</sup>は避けられる。パルツィファルは、もはや「赤い騎士」を殺害した頃のような一旦走り出すと止まらない戦闘機械ではなく、状況の微妙な変化を察知して適切に対応できる、成熟した判断力の持ち主として描かれている。

このような成長は「聖杯の城」で改めて確認される。本当に問う必要のあることは、実はもう、この時点で内容的にはほとんど残っていない。槍や聖杯のいわれ、聖杯の守護者とそれを取り巻く人々の人間関係など、主だった謎は隠者のおかげで全て解かれてしまっている。だからこそパルツィファルの問いは「伯父上 何にお苦しみですか（16: 795, 29: „oheim, waz wirret dir?“）」という、城主の具合を気遣うきわめて簡潔な一言に集約される<sup>21)</sup>。以前に隠者が立ててくれた形（「ご当主 ご病苦いかがか

20) ガーワンもきわめて遠縁（9親等）ながらパルツィファルの親戚である。

な (9: 484, 27: „hêrre, wie stêt iwer nôt?“)』を、パルツィファルはあえて流用しない。城主と自分の血縁関係を知った今となつては、後者の形では他人行儀すぎるのである。肉親としていたわる気持ちを前面に出すため「伯父上」と呼びかけ、親しい二人称 (dir) を用いることは、誰にそそのかされたわけでもなく、パルツィファル自身の行った選択であろう<sup>22)</sup>。今や彼は、倫理的に適切な行為原則とそれを各場面での確に应用するための判断力と、両者を兼ね備えた人物として「聖杯の城」に現れたことになる。次代の「聖杯の守護者」を得た城主は病苦から解放され、パルツィファル自身も離ればなれだった妻子と再会を果たし、ここに物語は大団円を迎えるのである。

### おわりに

『パルツィファル』は多彩な登場人物といい、重層的に進行する複雑な筋書きといい、さまざまな視点からさまざまな含みを持たされた作品であり、これを遺漏なく読み解くことは容易ではない。しかしそれでも、主人公パルツィファルの「問い」を通じた成長の過程が、どのような解釈を試みる際にも削れない物語全体の主軸をなしていることは否定できないだろう。それが上に見たような倫理的問題に集約されるかはともかく、パルツィファル (パーシヴァル) を主人公に据えたほとんどの説話はこの「問い」による成長という主題を共有しており、これを欠いたら説話として成り立たないような構造になっている<sup>23)</sup>。

(21) 正確にはこの直前 (16: 795, 21-23) に聖杯の在処を尋ねているが、これは聖杯の前で膝まずいて敬意を表するために過ぎず、聖杯の (既に解かれてしまっている) 謎にまつわる質問は「聖杯の城」では遂に立てられないままに終わる。

(22) Cf. [Mertens: 2003] S. 79. さらにメルテンスは、親しみのこもり具合の間接証拠として、ここのパルツィファルの台詞に方言が混じっている (dir の代わりに dier) ことを指摘している。ただし、定本に用いた版ではこの形は採用されていない。

(23) Cf. [Bumke: 1976] S. 66.

興味深いことに、パルツィファルを主人公に据えていない聖杯物語では、このような主人公の人格的成長は主題として取り上げられることが少ない。紙幅の都合上詳細には論じられないが、これにはおおよそ次の二つの場合が見られる。一つは、聖杯の守護者に理想の騎士よりむしろ宗教的聖者の姿を求めた結果、守護者となるための条件設定がさらに厳しくなっている場合である。ここでは一旦「汚れて」守護者候補としての資格を失ってしまうと、名誉回復はきわめて困難となる。とくに異性との交わりを偏執的なまでに罪悪視する傾向は、既にロベールの作品にも萌芽的に見られたが<sup>24</sup>、この傾向が更に徹底された後世の作品（仏語散文の『ランスロ物語 Prosa-Lancelot』）では、聖杯探求の主人公そのものを、人妻との密通という「汚れ」によって失敗を運命づけられた父（ランスロ／ランスロット）と、汚れなき「完璧な騎士」として成功を約束された息子（ガラード／ガラハッド）という、親子二代に分割することすら試みられる。父には罪人としての、息子には聖者としての固定した役割が割り振られているので、どちらに目を向けてもその人格的成長を追いかけていくような展開にはなりえない<sup>25</sup>。

もう一つは、これとは正反対に、騎士道物語の持つ世俗的な冒険活劇としての側面が強調された場合である（ハインリッヒ・フォン＝デム＝テュルリン『王冠』）。この場合、物語が理論上いくらでも続編を付け加えていけるような一話完結の形式となる以上、主人公にも最初から完成された英雄としての活躍が求められるため、その人間的成長を描く余地はやはり失われる。そればかりか聖杯探求自体が、そうした一話完結式のエピソードの一つに過ぎなくなるのである<sup>26</sup>。

宗教的教訓や娯楽文学としての要素は『パルツィファル』にも見られな

24) Cf. [Mertens: 2003] S. 95-101. ロベールは「ペルスヴァル」に聖杯の守護者としての資格を維持させるため、接近してくる女性を残らず未然に退けさせ、最後には出家までさせている。

25) Ibid. S. 111-118.

26) Ibid. S. 125-129.

いわけではないが、ここでは特定の要素が別の要素を押しつけて支配権を握ることはなく、むしろさまざまな要素が微妙な均衡を保ったまま、ある時には特定の、またある時には別の要素が前面に立つことで物語に変化と興行きを生み出している。そうした均衡の中でこそ主人公の成長を描くことができたし、また反対に主人公の成長を物語の中心にすえることで、物語が不特定多数の要素に分解するのを防いでいたとも考えられる。数ある同系統の説話の中でも、この作品が倫理的自己形成の物語として際立った完成度を示しているのには、以上のような事情が絡んでいたと思われる。

凡例：

『バルツイファル』からの引用箇所は各版共通の巻、節、行番号で示す。原文が韻を踏んだ叙事詩なので、ためにしに韻文調で訳出してみたが、内容の理解に差し障りがある、あるいは訳として不正確過ぎると思われた場合には、前後の説明で可能な限り補うよう心がけた。執筆にあたっては以下の1を定本とし、2を適宜参照した。

1. Wolfram von Eschenbach: *Parzival*. 2 Bde. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag), 1994. (中高ドイツ語／現代ドイツ語対訳。訳は正確さと読み易さのバランスに定評のある Dieter Kühn によるもの)
2. ———: *Parzival*. Eine Auswahl. Stuttgart (Reclam), 2005. (Wolfgang Mohr の達意の韻文現代ドイツ語訳を抄録したもの)

その他の参照・引用文献：

Bulfinch, Thomas: *The Age of Chivalry; or, Legends of King Arthur and the Knights of the Round Table*. 1858. (野上弥生子訳『中世騎士物語』岩波文庫、他邦訳多数)  
[Bulfinch: 1858]

Bumke, Joachim: *Wolfram von Eschenbach*. 4. Auflage. Stuttgart (Metzler), 1976.  
[Bumke: 1976]

Mertens, Volker: *Der Gral. Mythos und Literatur*. Stuttgart (Reclam), 2003.  
[Mertens: 2003]

吉田量彦『なぜ神が存在すると「想定しなければならない」か——カントの「道徳的存在証明」が示唆するもの』慶應義塾大学日吉紀要「人文科学」第20号, p. 49-71. [Yoshida: 2005]

*Summary*

## Gralssuche und moralische Selbstbildung. Bemerkungen über *Parzival*

Kazuhiko YOSHIDA

Wolfram von Eschenbachs *Parzival* lässt sich als Entwicklungsroman verstehen, in dem der Held seine anfängliche Unmündigkeit durch die langjährige Suche nach dem Heiligen Gral überwindet. Die entscheidende Rolle spielt dabei die Szene auf der Gralsburg, in der Parzival einer Reihe von wunderlichen Ereignissen ausgesetzt wird und es trotz seiner Verwunderung versäumt, darüber Fragen zu stellen. Nach dieser Szene wird er von verschiedenen Personen als Sünder bezeichnet.

Anders als die gängigen mythologischen Interpretationen geht der Verfasser davon aus, dass Parzival in der Gralsburg-Szene weniger die Unfähigkeit zum Verhängnis wird, angesichts der Wunder des Grals Fragen zu stellen, als vielmehr das *moralische* Versäumnis, dem unverkennbar leidenden Gralskönig gegenüber kein Mitleid gezeigt zu haben. Später zeigt sich, dass Parzival bereits in seiner frühen Jugend zwei moralische Fehler begangen hatte: Er verliess seine Mutter, was ihren Tod aus Kummer verursachte, und er erschlug einen Ritter, dessen Rüstung er sich gewünscht und den er deshalb zum Duell gefordert hatte. Nachdem der Held die beiden Sünden als Ursachen seiner personalen Fehlentwicklung erkannt hat, besucht er den Gralskönig wieder und beweist ihm seine menschliche Reife, woraufhin dieser ihn zu seinem Nachfolger bestimmt. Bei *Parzival* handelt es sich also um die Darstellung einer Entwicklung, in der der Held durch die Auseinandersetzung mit der eigenen Vergangenheit sich selbst zu einer moralischen Person bildet und dadurch fähig wird, für die eigenen Taten und ihre Folgen die Verantwortung zu übernehmen.